ソフト元日本代表監督 宇津木妙子さん 高崎市在住

北京「金」裏で支える

上野投手へ助言 成長に喜び

平成20（2008）年の北京五輪ソフトボール決勝、日本の上野由岐子投手が米国の打者を三塁ゴロに打ち取り金メダルを決めた瞬間は、日本の五輪史に残る名場面だ。テレビ中継の解説をしていた元日本代表監督、宇津木妙子さん(65)の「よし！ よし！ やった―！」という歓喜の声も感動に輪を掛けた。

【鈴木敦子】

この大会、上野投手は決勝トーナメントを1人で投げ抜いた。「上野の413球」は、その年の新語・流行語大賞に選ばれた。裏で支えたのが宇津木さんだった。

出発前の上野に「決勝トーナメントは全部投げろ。(日本代表の)斎藤(春香)監督に『三連投でも自分が全部投げる』と言いなさい」と助言しました。だって、上野で負けたら誰も何も言わないでしょ。上野がいれば金メダルが取れる。そんな予感がありました。

当時、宇津木さんは「ルネサス高崎（現ビックカメラ高崎）」の総監督。チームからは4人が代表に選ばれた。その一人が上野投手だった。ルネサス高崎からはトレーナーが同行した。

普段と同じようにアップして投げて、調整して、終わってクールダウンして、というルーティンができるように。ただ、実は、このことで他の選手と練習時間が合わないなどして上野がチーム内で浮いてしまい、10日間の大会期間中、裏ではちょっとしたトラブルがありました。結局はチーム内のコミュニケーション不足が原因。斎藤監督には「上野と向き合って話をしなよ」と声を掛けました。

北京五輪はみんながよく守って打ったから勝てた。投手だけでは勝てません。でも、やっぱり上野はよくやってくれた。スタミナの強さは若い時からの走り込みや投げ込みの成果。アテネでの悔しさをバネに、4年間めちゃくちゃ努力して頑張ったのでしょう。

平成16（04）年のアテネ五輪では銅メダル。日本代表監督を務めていたのは宇津木さんだった。このとき決勝トーナメントの大事な場面で上野投手を起用しなかった。ショックだったのか、上野投手はその後の取材に「エースなのに監督に信頼されていなかった」と口にしたという。なぜだったのか。

当時、上野はアテネ入り直後に風邪をひいたり、練習中に蜂に刺されたり……。仕方ないことだけれど、自己管理の大事さが身にしみたのでは。結果的にそれがエースとしての立場を自覚させ、上野を成長させたと思います。全てつながっているんですよね。指揮官の私の覚悟も足りなかったと思います。アテネの前のシドニー五輪（平成12年）で銀メダルを取れて、どこか油断があった。当時流行していたSARS（重症急性呼吸器症候群）の影響で合宿をできなかったなどの理由があるにせよ、もっとなりふり構わずやれば良かった。反省です。

宇津木さんが日本代表の監督に就いたのは平成10（1998）年。女性監督は初めてだった。監督時代は厳しい指導で知られた。「速射砲」と呼ばれた1分間に40本のノック。それを3時間ぐらい続けた。だが、グラウンドを離れれば違った一面も見せていた。

合宿が終われば打ち上げはどんちゃん騒ぎ。畳の宴会場で「今日はスペシャルゲストが来ています」と言って、こっそり私が衣装を着てテレサ・テンや美空ひばりの物まねをしたら、選手たちは大騒ぎ。グラウンドの鬼監督が率先してバカをやるわけですから。森昌子さんの「越冬つばめ」の最後を「ききわけのない選手です」と歌ってみたりね。選手同士も20歳からベテランの（宇津木）麗華（現日本代表監督）まで年齢層は広かったですが、言いたいことはぶつけ合い、家族のような一体感がありましたね。

20年の東京五輪で3大会ぶりにソフトボールが正式種目に復活する。日本は再び「金」に輝くことができるか。

当然期待していますよ。精いっぱいのプレーをしてほしい。そして上野には自分のために投げてもらいたい。日本のために私が投げなきゃ、ではなくて。私自身は日本ソフトボール協会の役員として、五輪を成功させなければならないと思っています。どの国の選手にも良い試合をしてもらいたいですね。

＝第1部おわり

現在ビックカメラ高崎シニアアドバイザーの宇津木妙子さん＝高崎市で

平成ものがたり

群馬の記憶

第1部 ⑩

㊤アテネ五輪代表の（左から）山田恵里選手、宇津木妙子監督、宇津木麗華主将、上野由岐子投手＝東京都内で平成16（2004）年5月13日、石井朗生撮影 ㊦北京五輪のソフトボール決勝で米国を3―1で破り優勝を決め喜ぶ上野由岐子（右から2人目）ら日本選手＝北京市の雲台ソフトボール場で08年8月21日、平田明浩撮影